

東京学芸大学版『インクルーシブ保育』の実践研究 I

— 附属特別支援学校幼稚部と保育園との交流学习 —

○小泉浩一 伊東久美子 田口悦津子 山内裕史 橋本創一 大伴潔 林安紀子

(東京学芸大学附属特別支援学校)

(東京学芸大学)

KEY WORDS: インクルーシブ教育 交流及び共同学習

【目的】 本校の幼稚部では 1978 年より東久留米市立さいわい保育園と交流保育を行っている。交流保育は障害のない幼児と活動をともにすることによって、生活経験を広げ、社会性を育むことを目標としている。本研究では、インクルーシブ保育を「①どの子どもも活動に参加する、②障害のある子どもだけでなく、多様なニーズをもつすべての子どもへの支援する保育」と定義し、本校と東久留米市立さいわい保育園との実践について検討することを目的とする。

【方法】 1)交流保育の概要 ①期間：平成 28 年 5 月～平成 29 年 2 月の毎週水曜日(午前 9 時 15 分～12 時 15 分)に実施し、27 回を計画した。②対象：本校幼児 4 名(4 歳 1 名、5 歳 3 名)、保育園児 1～5 歳 80 名。3 歳～5 歳の保育園児の縦割りの 3 グループに本校幼児 1～2 名が参加した。③保育園の日課：自由遊び、朝の体操、集会、課題遊び、給食である。④通信の発行：交流保育の様子を家庭に知らせる通信を本校と保育園で発行した。2)合同会議の実施：ケース会議の名称で教員と保育士の合同会議を定期的実施し、幼児の活動参加や多様なニーズをもつ子どもへの支援について協議した。

【結果】 1)どの子どもも活動に参加することに向けて 交流保育の概要年間では 26 回の交流保育を実施した。**【表 1】** ケース会議は 8 回実施した。活動を数例抽出して記述する。

①自由遊び：登園後幼児は遊びたい遊びを自由に行う。砂遊びやどろんこ遊び、三輪車、上り棒などの固定遊具、おままごと遊び、人形遊びなど幼児たちは好きな遊び場で遊んだ。教師と保育士は自由遊びの幼児の様子から活動参加や個の支援に向けた手がかりを観察した。

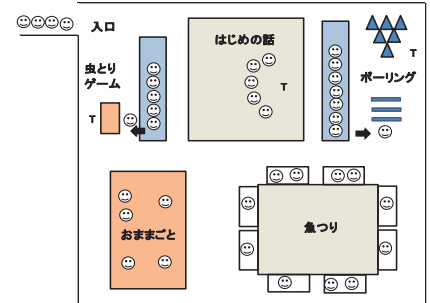
②お神輿づくり(6/22)：お神輿を作る課題遊びで、本校の幼児は色塗り、花づくりといった工程の一部に参加した。幼児は活動に熱中した。ものづくりの一部の工程を本校幼児と保育園児が一緒に行うという展開は、本校幼児にとっても活動が理解しやすく活動参加には有効な設定であった。

③活動の共有：朝の体操のダンスなどの保育園の活動を動画で持ち帰り、本校でも自由遊びの時間に取り組み組めるようにした。交流保育でそのダンスの曲が流れると、本校の幼児は幼児の輪の中央で出て、自分から踊りだした。また、本校の活動(ダンスなど)を交流保育以外の日に保育園で使えるようにした。本校幼児と保育園児が双方のダンスで手をつないで踊り、幼児たちは楽しんだ。交流先の活動を共有することは幼児間の協働ややりとりを促進させる一助となった。④縁日ごっこ(7/13、9/7)：子どもたちが一目で全部の遊を見渡せる広いホールで行なった。遊ぶ場所などが見てすぐわかるように色のついたマットを敷いた。**【図 1】** 遊びの内容

回数	月日	課題遊び名	回数	月日	課題遊び名
①	5/11	いも苗植え	⑭	10/26	仲間あつめ
②	6/1	顔合わせ会	⑮	11/2	いも掘り
③	6/8	どろんこ遊び	⑯	11/9	交流散歩
④	6/22	お神輿づくり	⑰	11/16	人形劇鑑賞
⑤	6/29	お神輿担ぎ	⑱	12/14	もちつき
⑥	7/6	くわがた鑑賞	⑲	1/11	人形劇鑑賞
⑦	7/13	縁日ごっこ	⑳	1/18	新年「お楽しみ会」
⑧	9/7	縁日ごっこ	㉑	1/25	お話の会
⑨	9/14	歯科指導	㉒	2/1	自由遊び
⑩	9/28	運動会ごっこ	㉓	2/8	人形劇鑑賞
⑪	10/5	運動会ごっこ	㉔	2/15	中止(インフルエンザ)
⑫	10/15	交流運動会	㉕	2/22	劇の発表
⑬	10/19	運動会ごっこ	㉖	3/18	卒園式

【表 1】平成 28 年度の活動経過

は自由遊びの幼児の様子から選ばれた。魚のクリップを釣竿の磁石でつる魚釣りとおままごととは順番を待たなくても遊べるようにした。転がす位置を自分で決めるボーリングゲームや穴から出てく



【図 1】縁日ごっこ配置図

る虫を網でとる虫取りゲームは順番を待って遊ぶ活動にした。

順番の理解できない幼児が順番を意識するようになり、幼児の発達年齢と運動スキルに見合った活動が効果的に設定された。⑤運動会ごっこ(9/28、10/5、10/15、10/19)：運動会前になると、課題遊びでは運動会ごっこを実施した。幼児は繰り返し遊びながら、運動の仕方を理解し、自分の課題に自分から臨んだ。ミニサーキットでは障害物の斜面の角度を自ら選び繰り返し取り組んだ。幼児が達成感を感じられるように保育士によって段階的に調整された。本校幼児は、運動発達に見合った年齢段階の活動に参加した。**【表 2】** 運動会では各種目に臨む幼児と応援席で応援する大勢の幼児や保護者の熱気であふれた。

種目	園児	幼稚部幼児
① よーいどん	全員	
② おいしいものみつけた!	1歳児	
③ めっきらもちつきらどおんどん♪	2歳児	
④ 虫たちのパーティー	5歳児	
⑤ なかよしでんしや	3・4・5歳児	幼稚部幼児
⑥ 地域のおともだちあつまれ!	地域の友達	
休 息		
⑦ おせんべいパクリ	3・4・5歳児	幼稚部幼児
⑧ めがせ!!てっぺん!	5歳児	幼稚部幼児
⑨ 南の島をめざして!!	3歳児	幼稚部幼児
⑩ ぬきあし さしあし すすめ!!	4歳児	幼稚部幼児
⑪ パパもママもだい好き♡	1・2歳児親子	
⑫ リレー	5歳児	
昼 食		
⑬ オープニング『大地をけて』	全員	
⑭ 大好きギューン♥	3歳児親子	幼稚部親子
⑮ 親子で仲良くデカパン	4歳児親子	幼稚部親子
⑯ お兄ちゃんお姉ちゃん頑張っ!	学童	
⑰ オセロdeポン!	5歳児親子	
⑱ 親子ダンス『メリーゴーランド』	全員	
おわりの会	記念品 バンダント紹介 おわりの言葉 記念撮影(5歳児)	

【表 2】運動会のプログラム

だ。幼児が達成感を感じられるように保育士によって段階的に調整された。本校幼児は、運動発達に見合った年齢段階の活動に参加した。**【表 2】** 運動会では各種目に臨む幼児と応援席で応援する大勢の幼児や保護者の熱気であふれた。

【考察】 1)どの子どもも活動に参加することに向けて：本実践から以下の視点や配慮が有効であった。①活動内容については、幼児の発達段階や運動スキルに見合った活動にすることは当然ながら、事前の遊びの中で活動の導入や調整を行ったうえで、交流保育時の活動内容を設定することが重要である。②活動の展開については、構造化や視覚化に留意し活動を幼児に理解しやすいものにする、遊び方やルールを幼児が選択できるようにすることなどである。2)多様なニーズをもつ子どもへの支援：本研究Ⅱで本校幼児の支援を、本研究Ⅲで保育園児の支援について報告する。本実践は、本校幼児の保育園の日課への定期的な参加、教員と保育士の合同会議の実施、保護者への通信の発行などの基礎的環境整備がされており、交流保育への配慮事項が本校と保育園の双方で長年の実践で構築されている背景がある点に特徴があるといえよう。

【文献】 黒川久美(2016) 「インクルーシブ保育と保育のあり方」 研究に関する覚書。南九州大学人間発達研究 第 6 巻。93-97

(KOIZUMI Koichi, ITO Kumiko, TAGUCHI Etsuko, YAMAUCHI Yuji, OHTOMO Kiyosi, HASHIMOTO Soichi, HAYASHI Akiko)